



但馬水産技術センターだより



漁況情報 (G2109号)

令和3年4月28日

兵庫県立農林水産技術総合センター
但馬水産技術センター 発行

1. 2021年度第1回日本海スルメイカ長期漁況予報をお知らせします。

国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所と日本海沿岸各道府県水産関係機関が検討し、水産資源研究所がとりまとめた2021年5月～7月のスルメイカ漁況予報をお知らせいたします。

【今後の見通し(2021年5月～7月)】

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海沿岸域（下図参考）

対象漁業：主にいか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群

(1) 来遊量：前年並みで近年平均を上回る。

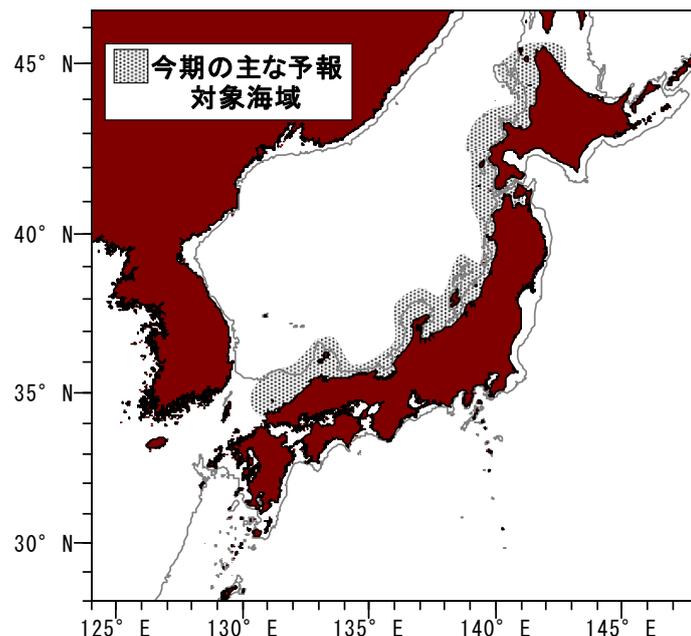
(2) 漁期・漁場：主な漁場は本州北部日本海以北で漁期は近年同様。

※「近年平均」は最近5年間（2016年～2020年）の平均。

※「本州北部日本海以北」は石川県以北を示す。

詳細は、別添の予報文資料をご覧ください。

予報内容の詳細は、国立研究開発法人水産研究・教育機構のウェブサイト（2021年度プレスリリース：<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2021/index.html>）にも掲載されています。



お問い合わせ先：
兵庫県但馬水産技術センター（鈴木）

TEL：0796-36-0395 FAX：0796-36-3684

email：nouringe_tajima@pref.hyogo.lg.jp

ホームページ：http://www.hyogo-suigi.jp/tajima/index.htm

2021年度 第1回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2021年5月～7月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海沿岸域

対象漁業：主にいか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群

- (1) 来遊量：前年並で近年平均を上回る
- (2) 漁期・漁場：主な漁場は本州北部日本海以北で漁期は近年同様

* 近年は最近5年間(2016年～2020年)

I 漁況予報

日本海におけるスルメイカの資源調査結果（2020年10月のスルメイカ稚仔調査I、および2021年4月のスルメイカ新規加入量調査）と海況予報を主要な情報として、今期（2021年5月～7月）の日本海沿岸域におけるスルメイカの漁況を下記のとおり予測した。併せて2020年12月のスルメイカ稚仔調査IIの結果と、2021年4月のスルメイカ漁期前分布調査で得られたスルメイカの分布状況も示した。

【予測】

今期（2021年5月～7月）の日本海沿岸域へのスルメイカ来遊量は、前年並で近年平均を上回ると予測される。また、対馬暖流域における4月中旬～6月の水温は平年よりも「かなり高め」と予測されているが、近年の資源状況および調査結果から主な漁場は本州北部日本海以北で漁期は近年同様と予測される。

【情報】

- (1) 2021年4月に実施したスルメイカ新規加入量調査の結果では、今期漁獲対象になると予測される外套背長5cm以上のスルメイカの1調査点あたりの採集尾数は3.4尾で、前年（0.7尾）を上回り、近年平均（6.9尾）を下回った。
- (2) 2020年10月に実施したスルメイカ稚仔調査Iでは、親魚量の指標となる幼生の分布密度は、前年および過去5年（2015年～2019年）平均を上回った。
- (3) 2021年度第1回日本海海況予報では、スルメイカの漁場形成に影響を与える4月中旬～6月の対馬暖流域の表面水温と50m深水温は、共に平年よりも「かなり高め」と予測されている。
- (4) 2020年5月～7月の小型いか釣り等によるスルメイカ（生鮮）の漁獲量は、日本海沿岸域全体で過去5年（2015年～2019年）平均を上回った。海域別にみると道北・道央ならびに道南・津軽で過去5年平均を下回った一方で、本州北部日本海および西部日本海では過去5年平均を上回った。
- (5) 前年の4月に実施したスルメイカ新規加入量調査の結果に反し、予報対象期間（2020年5月～7月）の漁獲量が多かったことから、来遊量も多かったと推測された。このことから、実際の来遊量に対し調査結果は過小であったと考えられた。本年の同調査結果は前年を上回っているものの、近年の中では来遊量の多かった前年以上の来遊があるとは考えにくい。

II 説明

1. 調査結果

1) 4月におけるスルメイカの分布状況

<目的>

いか釣り漁業では外套背長15cm以上のスルメイカが主な漁獲対象となる。したがって、いか釣り漁業で漁獲される前のスルメイカ（主に外套背長2cm～10cm）の分布状況を把握することで、その後の漁況を予測することが可能となる。そこで、日本海では主漁期前の4月に漁獲加入前のスルメイカの分布状況を把握するために新規加入量調査^{*1)}を実施している。なお、本調査で採集されたスルメイカのうち、外套背長5cm以上のサイズが本予報期間（5月～7月）の漁獲対象になると想定される。

加えて本予報期間（5月～7月）の前半に漁獲対象となるスルメイカの日本海での分布状況を把握するため、2019年より4月にスルメイカ漁期前分布調査^{*2)}を実施し、スルメイカの分布状況を整理した。

*1) スルメイカ新規加入量調査：網口幅10m～12mの表層トロール網を用いた採集調査。各調査定点で3ノットの速度で30分間曳網して実施。

*2) スルメイカ漁期前分布調査：自動いか釣り機による釣獲試験。各調査定点で夜間に原則8時間の釣獲を実施。

<結果>

2021年の新規加入量調査では、トロール調査を22点で実施した（図1）。外套背長5cm以上のスルメイカは北緯37度50分以北、東経134度30分以西の海域で多く採集された（最大27尾）。一方、外套背長5cm未満のスルメイカは東経135度30分以西の調査点で多く採集されており、北緯36度20分、東経134度30分の点で最大66尾、ついで北緯37度50分、東経134度31分の点で65尾採集された。

1調査点あたりの平均採集尾数は18.5尾で、前年（5.3尾）の351%で、近年平均（23.5尾）の79%であった。また、本予報期間（5月～7月）の漁獲対象になると想定される外套背長5cm以上の平均採集尾数は3.4尾であり、前年（0.7尾）の471%、近年平均（6.9尾）を49%であった（図2）。

2021年の漁期前分布調査では、いか釣り調査を20点で実施した（図3）。採集されたスルメイカは外套背長13cm～15cm台（図3における16cm台に含む）の小型個体と18cm～19cm台のより大型個体（図3における17cm～18cm台および19cm～20cm台に含む）が多く見られ、比較的沖合に小型個体、沿岸に大型個体が分布していた。分布密度の指標となるCPUE（釣り機1台1時間あたりの採集尾数）の平均値は4.9尾で、2019年の3.8尾、前年の0.1尾を上回った。CPUEは隠岐西の点で最大43.2尾であった。またスルメイカが採集されなかった点もあった。

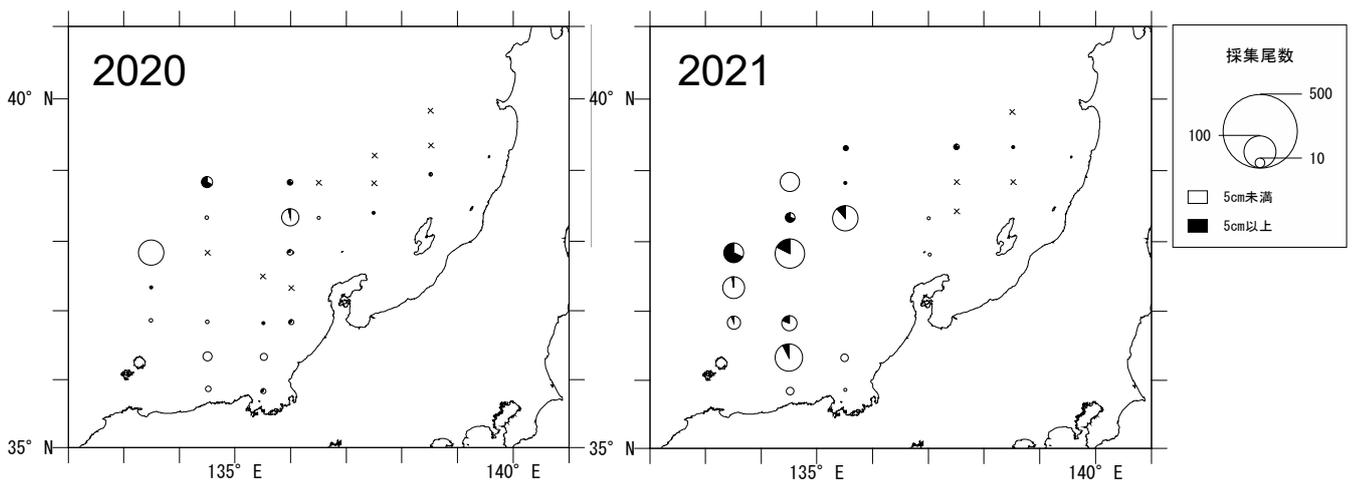


図1 2020年および2021年4月のスルメイカ新規加入量調査結果

○の面積は採集尾数、×は採集されなかった調査点をそれぞれ示す。

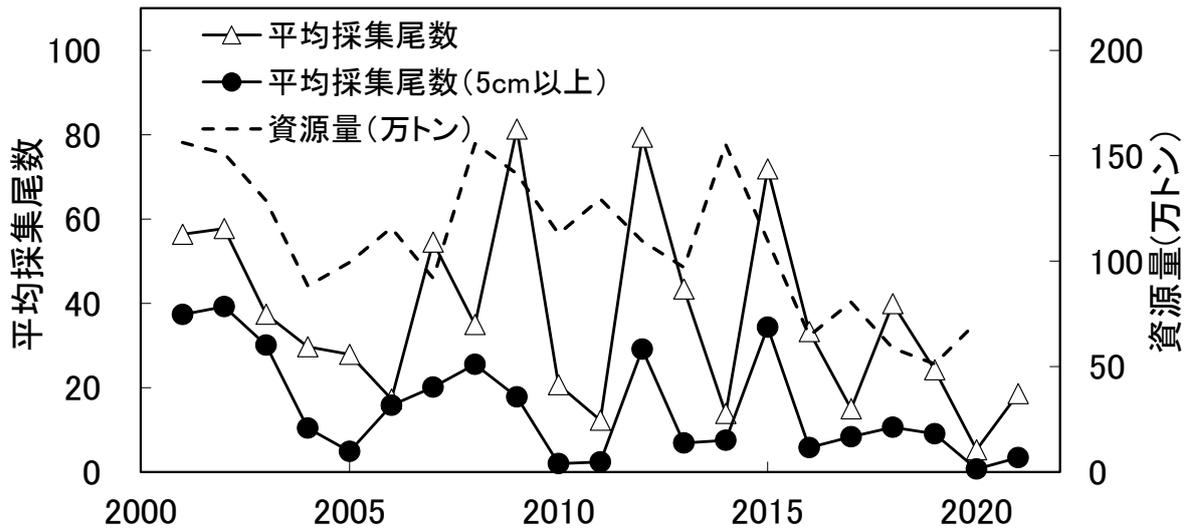


図2 新規加入量調査による平均採集尾数（全数および5cm以上）と推定資源量の経年変化
推定資源量は令和2年度スルメイカ秋季発生系群の資源評価に基づく。

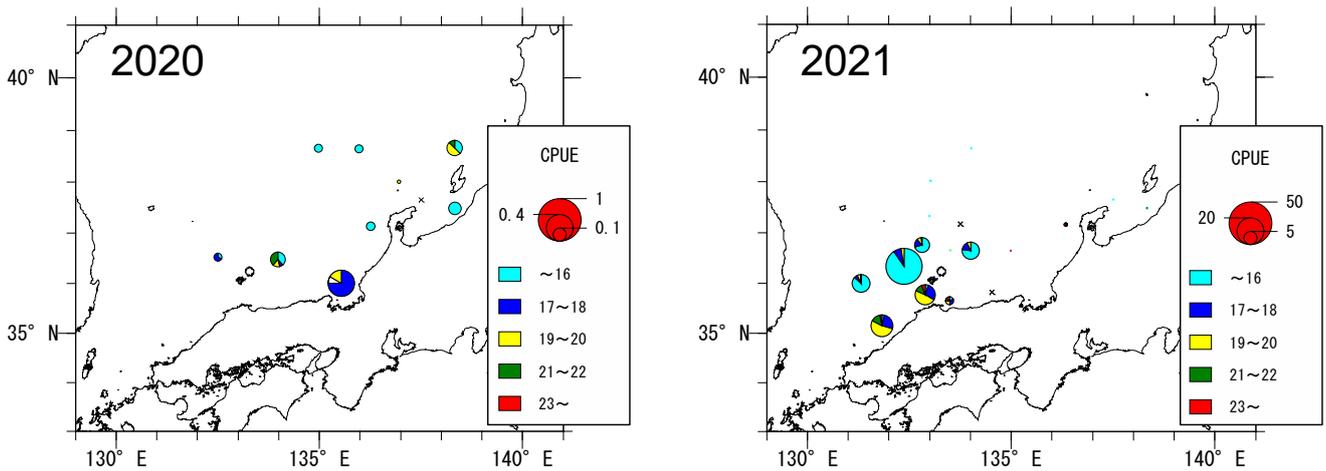


図3 2020年および2021年4月のスルメイカ漁期前分布調査結果

●の面積はCPUE（釣り機1台1時間あたりの採集尾数）、各色は各外套背長範囲（cm台）の比率、×は採集されなかった調査点をそれぞれ示す。

2) 2020年秋のスルメイカ幼生の分布量

<目的>

5月～10月の日本海では、主に前年の秋～冬に生まれたスルメイカ秋季発生系群が漁獲される。したがって、秋～冬のスルメイカ幼生の分布量は、その年のスルメイカ秋季発生系群の親魚量（とり残し量）の指標値になる。そこで、日本海では毎年10月～11月および12月にスルメイカ稚仔調査I、II^{*3}）をそれぞれ実施し、親魚量の把握を行っている。

*3) スルメイカ稚仔調査I、II：口径45cmのプランクトンネット（網目合0.33mm）を用いた採集調査。各調査点で深度150mから海面までの鉛直曳によって主に外套背長1mm～3mmのスルメイカ幼生を採集する。

<結果>

2020年10月の調査では鳥取県沖から対馬海峡、五島列島の南にかけての海域で幼生が採集された（図4左）。1調査点あたりの平均採集尾数は0.62尾で、2019年の調査結果（0.27尾）の233%、過去5年（2015年～2019年）平均（0.26尾）の236%であった（図5）。また12月の調査では、北緯31度付近の海域でほとんどの幼生が採集され、

1調査点あたりの平均採集尾数は0.10尾（前年0.10尾）であった（図4右）。2016年以降の秋の幼生の分布密度は、1988年以前並の低い水準で推移していたが、2020年はこれを上回り、2015年並の分布密度であった。以上から、2020年の漁期終了後の秋季発生系群の親魚量は前年を上回り、過去5年平均よりも多かったと判断される。

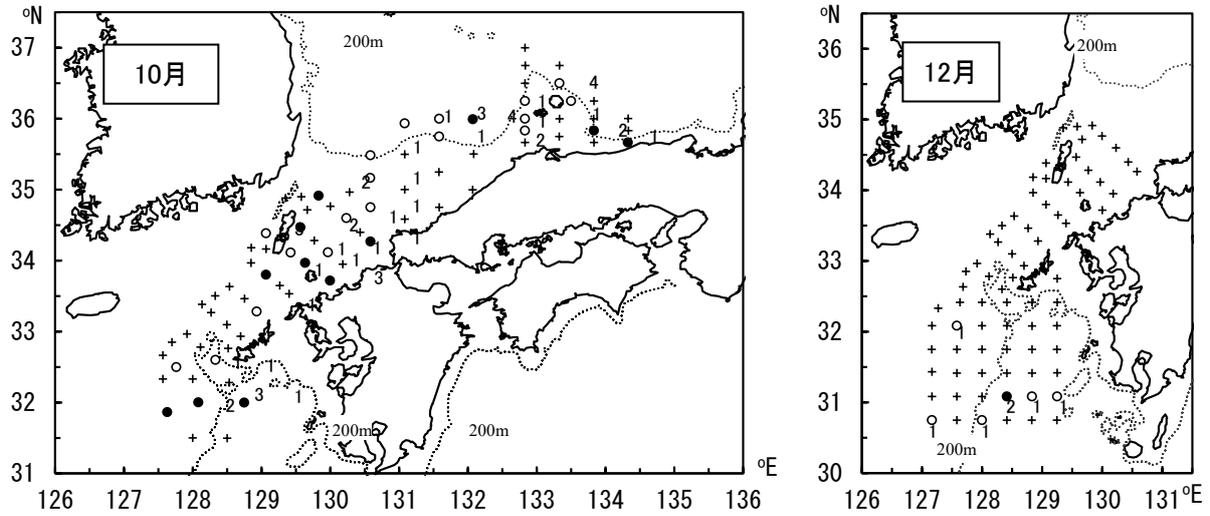


図4 2020年10月（左）と12月（右）におけるスルメイカ幼生の分布調査結果

● 1mm未満の幼生が1個体以上採集された調査点、○ それ以外の幼生のみが採集された調査点、+ 幼生が採集されなかった調査点。図中の数字は各調査点における採集尾数。

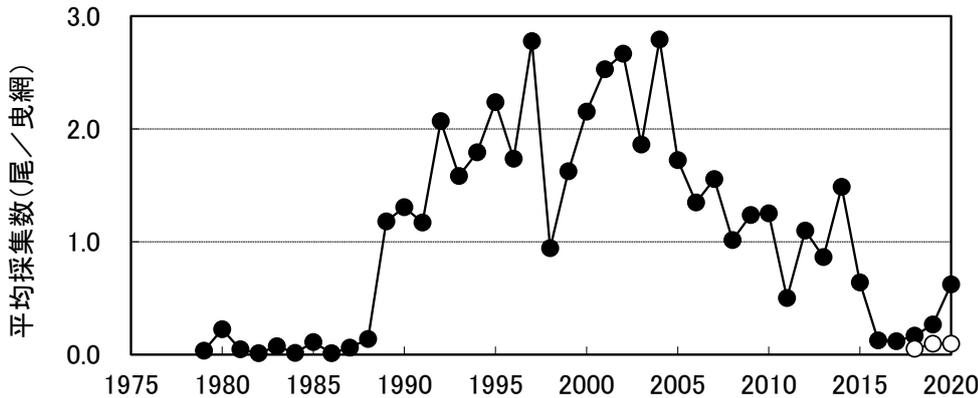


図5 スルメイカ幼生の1調査点あたりの平均採集尾数の経年変化
●は10月～11月、○は12月の平均採集尾数をそれぞれ示す。

2. 日本海における海洋環境

スルメイカの分布回遊は水温と深く関連しており、沿岸域の漁場形成は主に水温に左右される。2021年度第1回日本海海況予報^{*4)}では、対馬暖流域における4月中旬～6月の表面水温および50m深水温は、平年よりも「かなり高め」で経過すると予測されている（日本海海況予報における平年は1986年～2015年の平均値）。

*4) <http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2021/20210409/index.html>

Ⅲ 日本海におけるスルメイカ漁況の経過

日本海では、1月～3月上旬は前年の冬に生まれたスルメイカ（冬季発生系群）が主に漁獲され、3月中旬～4月は前年の春～夏に生まれたスルメイカ、5月以降は前年の秋に生まれたスルメイカ（秋季発生系群）が漁獲の中心となる。このため、1月～3月の漁況は予測対象期間の漁況には直接結びつかない。

前年の予報対象期間（2020年5月～7月）では、漁獲量は日本海沿岸域全体で過去5年（2015年～2019年）平均の155%と上回った（図6）。海域別に見ると、道北・道央ならびに道南・津軽で過去5年平均のそれぞれ23%、28%と下回った一方で、本州北部日本海および西部日本海では過去5年平均のそれぞれ254%、159%と上回った。8月～12月計も、道北・道央ならびに道南・津軽では過去5年平均のそれぞれ27%、29%と下回った一方

で、本州北部日本海は過去5年平均の191%と上回った。

2021年1月～3月の漁獲量については、本州北部日本海では1月～2月は前年の67%で近年平均の92%だったが、3月は前年の194%、近年平均の127%であった。西部日本海では1月～3月は前年の90%、近年平均の89%であった。

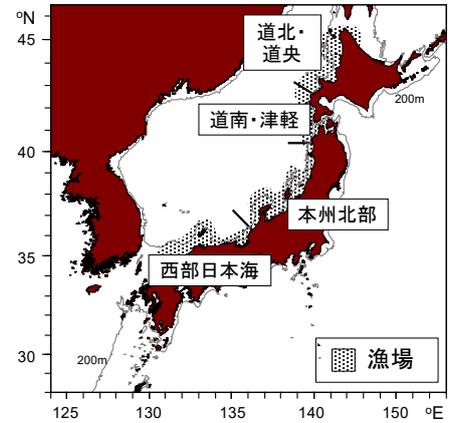
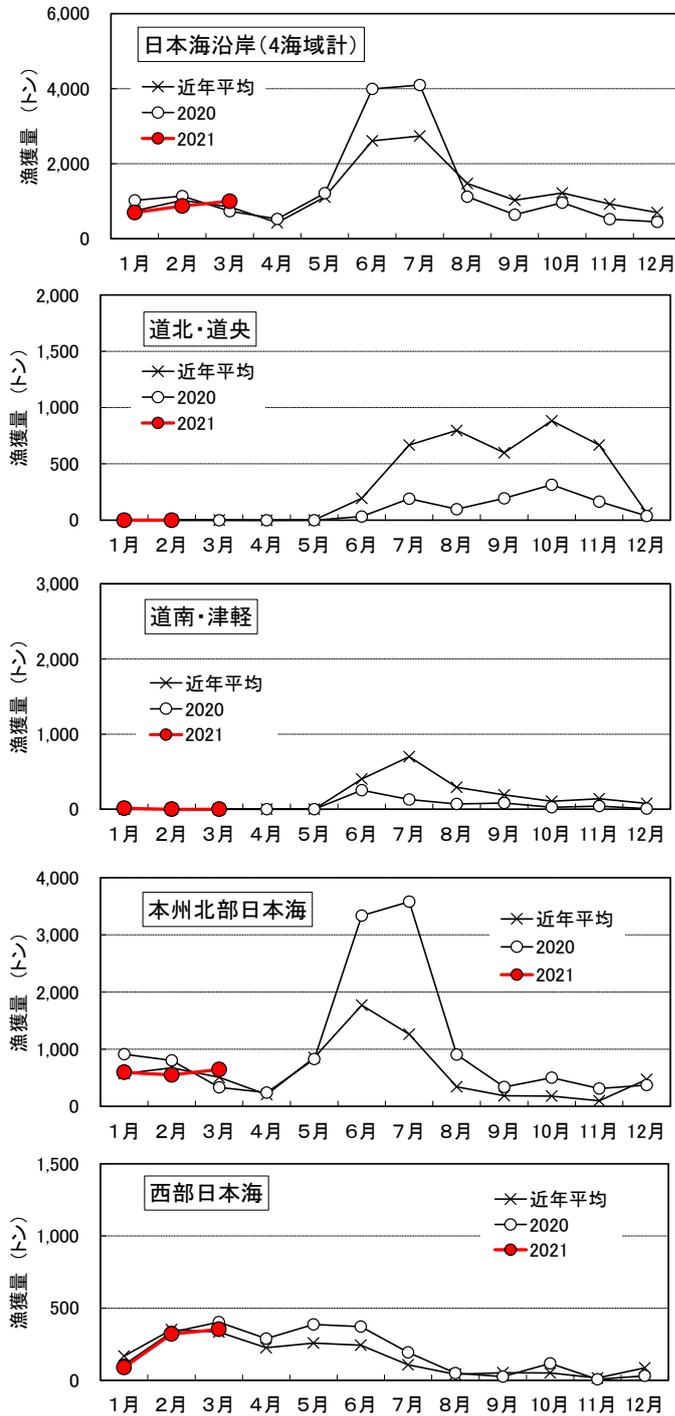


図7 本予報における漁獲量の海域区分
道北・道央は宗谷～後志、道南・津軽は渡島・檜山・青森県、本州北部日本海は秋田県～石川県、西部日本海は福井県～長崎県をそれぞれ示す。

図6 日本海沿岸(4海域計)および海域ごと(図7)の漁獲量(近年平均、2020年および2021年)の経過
ただし2021年の一部は未集計および速報値

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場 稚内水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産研究所	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター (取りまとめ機関)
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所